

ドウ 堂 石川郡富樫庄に屬する部落。實永誌に、此の村持山の内横隅谷といふ所に、横隅右衛門の館跡がある。又同村領を流れる内川のうちにつゞかけ岩といふのがあるが、名の因つて起る所はわからぬと記してある。横隅を横角と書いたものもある。

ドウ 道 石川郡宮丸の内の子字。

ドウアンジ 道安寺 河北郡秋濱に在つて、眞宗東派に屬する。

ドウアンバシ 道安橋 ↓コウリンボウバシ 香林坊橋。

ドウアンヤワ 道庵夜話 二冊。寶曆・明和の頃金澤に居た博徒鶴來屋本之助・燈籠竹丹藏・白銀屋與左衛門等のことを、大望を抱いた俠者として描いた小説である。燈籠竹と與左衛門の外は、實在した人物か否か判らぬ。道庵は著者の名であらう。

ドウイン 道印 ↓ゲツパドウイン 月波道印。

ドウイン 道印 ↓テツシンドウイン 鐵心道印。

ドウインジ 道因寺 石川郡相川に在つて、眞宗東派に屬する。もと金澤材木町に居たが、明治十五年河北郡山上村に移り、二十一年更に今の地に轉じた。

トウウンジ 等雲寺 金澤宮本町に在つて、眞宗東派に屬する。

トウウンジ 桃雲寺 石川郡野田に在る。この寺はもと神谷丹波・篠原出羽の造立した小庵であつたが、慶長五年前田利長が改營して、寶圓寺の象山徐芸を隱居せしめ、野田山なる利家の墳墓を守らしめた。年不詳前田利長の書面に、『いんきよはうゑん寺』とあるも

のこれが爲で、初めは野田寶圓寺というたが、やがて利家の法名によつて桃雲寺と改めた。次いで慶長十八年利常から寺領五十八石を附し、元和元年六月十八日災あり、芳春院夫人再造し、泰山雲堯をこゝに住せしめ、利政の遺子三左衛門直之を檀越とした。次いで寛永十五年諸士の奉加を以て更に修營した。

トウエモンマル 藤右衛門丸 金澤城内權現堂の後地で、元は北ノ丸内の曲輪であつた。慶長金澤古圖に、小塚藤右衛門の第地であると記載され、越登賀三州志には、小塚丸、今は藤右衛門丸と云ふ。古へ小塚藤右衛門の居た所で、古圖に幅員四十間に三十三間とあり、北ノ丸の隣地である。眞享の圖には、此地既に接木知になつてゐるとある。蓋し小塚藤右衛門は天正十一年四月柳瀬合戦に戦死したから、藤右衛門の第の金澤城にあるべき筈がない。或は藤右衛門弟淡路秀正の舊第かも知れぬといふのが舊説である。案ずるに、天正十八年前田利家が金澤城に留守した前田安勝に與へた消息に、『富田藤右衛門屋敷ニ普請を可仕候間、下ニ御くだし可有之候。』とあつて、かの藤右衛門といふものはこれではあるまいかと思はれる。下ニ御くだしは現に藤右衛門屋敷に居るものを城外に退去せしめよとの意であらう。

トウガ 桃芽 ↓ノシロヤトウガ 野代谷

桃芽。

ドウカイ 道海 ↓ブツシンドウカイ 佛心道海。

トウカイドウ 東街道 ↓カミカイドウ 上街道。

トウカイドウキコウ 東海道紀行 一冊。また已巳紀行ともいふ。俳人麥水が寛延二年五月金澤を發して江戸に出で、六月末そこを去つて、七月十五日伊勢山田に入り、麥浪舎を浪を訪ひ、更に京に赴いて歸郷した紀行である。寛延二已巳重陽石浦南濱山人跋。今稿本を存するが、巻首數葉を失うて、武藏金澤巡覽以後の記事を殘してゐる。

トウカイノヒヤクイン 東海の百韻 一冊。能登の俳人文涼の稿本で、著者が東海道の風光を想像して作つた百韻に、當時の諸俳人の發句附合を添へたものである。安永己亥孟冬見風跋。

トウカクジ 等覺寺 珠洲郡川浦に在つて、眞宗東派に屬する。山號は金石山。

トウガクジ 棟岳寺 金澤上鷹匠町に在つて、寶林山と號し、曹洞宗に屬する。眞享二年由來書に、當寺開山は越前坂井郡本庄龍雲寺の祖大空玄虎の嗣法東木長樹で、明應元年同國南條郡主赤座但馬景秋が之を新道村に建立したに起る。後赤座備後吉家が前田利長の召に應じて金澤に移つた時、八代南室之に隨ひ、慶長八年備後下屋敷に寺を建てたが、備後の子土佐の利常に供奉して小松に移るに及び、寺地を召上げられ、尋いで慶安二年小立野に今の所を請ひ得たとある。

トウガサキ 塔ヶ崎 江沼郡潮津領に在る。爰慈紀開に、昔宮地村の寺に建てたる石塔を舟

積にして運んだが、この湖邊で沈没した故に塔ヶ崎といふとある。

ドウガタクラマイ 堂形藏米 金澤廣坂下の堂形と、紺屋坂下の新堂形とに米藏があつて、共に藩米を納め、歩士・足輕・小者などの扶持米をこゝから下附した。その扶持を堂形下行米といひ、その米を堂形藏米といふた。

ドウガタコメクラ 堂形米倉 金澤城外廣坂下今の縣廳の在る所にあつた藩の米蔵で、之を堂形と名づけるは、もと堂形の場であつた附近の地であるからである。米倉創立の年代は、前田綱紀の時越中組大工肝煎與三右衛門父淨雲八十七歳の口演書に、『本堂形以前は近藤甲斐守屋鋪と申候。其節御藏無御座候。御米藏出來以後堂形与申候。年數六十年許に罷成候様に覺申候。』とあつて、年紀は明らかでないが、若し寛文頃の調査とすれば、六十年前は寛永頃となる。本堂形又は古堂形といふたのは、後に新堂形が出来たからである。

ドウガタシンババ 堂形新馬場 金澤の堂形にあつた。年代摘要萬治三年の條に、十二月堂形御馬場が出来たとあり、越登賀三州志來因概覽附録には、堂形新馬場萬治三年六月から十月に至つて成るとある。長さ百七十一間一尺、濶八間二尺、土居の高さ六尺或は二間。この馬場は藩末まで存した。

ドウガタニ 堂ヶ谷 珠洲郡直郷に屬する部落。元祿十四年の郷村名義抄に、『此所の百姓次兵衛と申者の家名堂ヶ谷と申候。依之村名に罷成由申傳候。』能登名跡志に、『昔大師建立の地藏堂ありし故名とせり。此村過半一向宗にて、此地藏堂を毀ちて、本尊を杉の木

のまたに立置きしに、その尊像次第にいつと